

## 愛知郡秦荘町安孫子北遺跡の 274. 弥生時代後期～古墳時代前期の 出土遺物について

### 1. はじめに

安孫子北遺跡は、湖東平野の一級河川である愛知川、宇曾川によって形成された扇状地に立地する。当遺跡から現琵琶湖岸まで直線距離約10kmの距離がある。愛知・犬上郡では、県下でも最大級の後期古墳群である秦荘町金剛寺野古墳群や、湖東町勝堂古墳群に象徴されるような「依智秦氏」などの渡来系氏族によって、急激に開発が行われた地域として知られている①。

弥生時代には、主として琵琶湖岸ないしは内湖周辺の低湿地に開発が集中している。特に、愛知川下流域の能登川町では、柿堂遺跡②斗西遺跡③④、中沢遺跡、宮の前遺跡などで弥生時代から古墳時代にかけての竪穴式住居、方形周溝墓群がまとめて確認されており、湖東北地域における拠点集落として考えられている。

当地域内陸部では、中期から後期に至ると遺跡の数は確実に増加傾向を示す。このことは、農業生産の安定によって人口増加が生じ、さらなる可耕地を求めて、愛知川流域周辺の自然堤防上や微高地へ集落を分散させていったためと考えられる。愛知川右岸の弥生時代の遺跡は、愛知川町東円堂遺跡で石鏃の採集、同町市遺跡では弥生時代前・中期の土器、秦荘町矢守遺跡から弥生時代中期の土器の出土、愛知川町沓掛遺跡⑤、なまず遺跡⑥では弥生時代後期の方形周溝墓が確認されている。

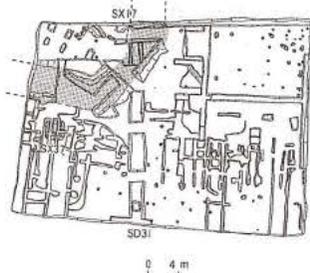
### 2. 遺跡の概要

当遺跡は、昭和59～60年度にかけて秦荘町教育委員会が分布調査を実施した際に発見された遺跡である。平成元年に実施された秦荘町大字東出490-2番地における民間の駐車場造成工事に伴う発掘調査⑦では、縄文晩期～古墳時代までに治まった自然河道、5世紀末の掘立柱建物1棟、溝1条、鎌倉時代の掘立柱建物13棟、井戸2基、溝数条を検出した。平成2年度に実施された秦荘町大字安孫子字柳246-1番地における民間の資材置場造成工事に伴う発掘調査⑧では、平成元年度と同様に自然河道、鎌倉時代の掘立柱建物5棟、溝、井戸を検出した。この2回の調査によって鎌倉時代の遺構、遺物が多数検出されたため、以後当該遺跡



第1図  
周辺遺跡位置図

1. 安孫子北遺跡
2. なまず遺跡
3. 沓掛遺跡
4. 斗西遺跡
5. 法勝寺遺跡
6. 大塚遺跡



第2図 A調査区平面図

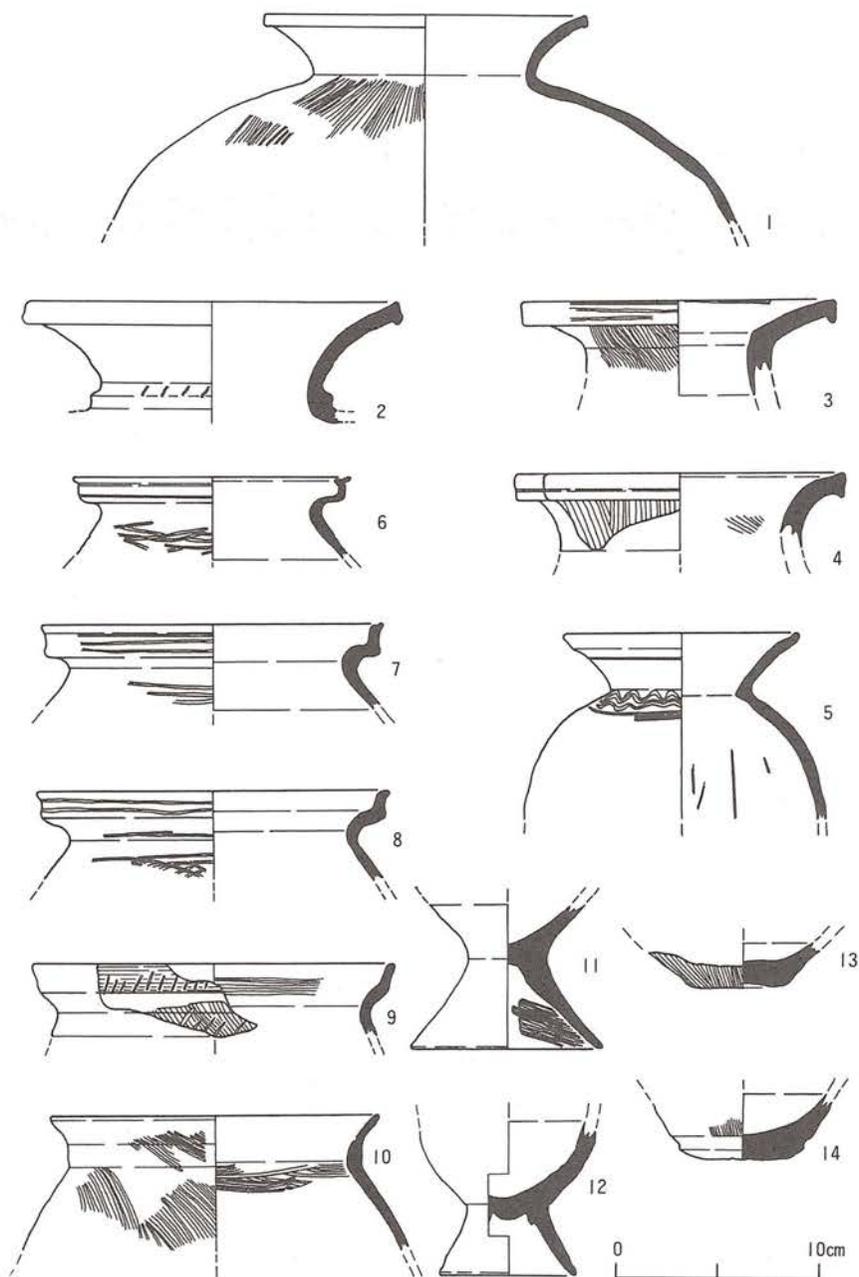
は主に鎌倉時代の集落遺跡として周知されてきた。

平成9年度に実施された秦荘町大字東出まこ川482番地、他における民間の店舗造成工事に伴い開発対象面積が約4,403㎡のうち、約1,500㎡の発掘調査を実施した。調査では、これまでの調査と同様の自然河道、弥生時代後期から古墳時代前期にあたる溝4条(SD01、02、08、SX17)、これまでの調査で検出した鎌倉時代の掘立柱建物群の東限を区画する溝1条(SD31)、室町時代の土城3基を検出した。

この中でSX17から、まとまった遺物が出土している。愛知・犬上郡では良好な資料の乏しかった弥生時代後期から古墳時代前期の遺物が多数出土している点で注目される。SX17は、幅約4.5m、最深部で約0.8mを測る。全体を確認できなかったが、方形に巡るとすると周溝墓の可能性が高い。その中で、SX17の第XI層から出土した遺物は、祭祀行為に使用された土器が一括で廃棄されたと考えられる。

### 3. 出土遺物の検討

まず、安孫子北遺跡のSX17から出土した遺物の特徴についてみてみる。特に、第XI層にて各器種がまとも



第3図 S×17出土遺物(1)

って出土しているのでこれを中心に紹介したい。

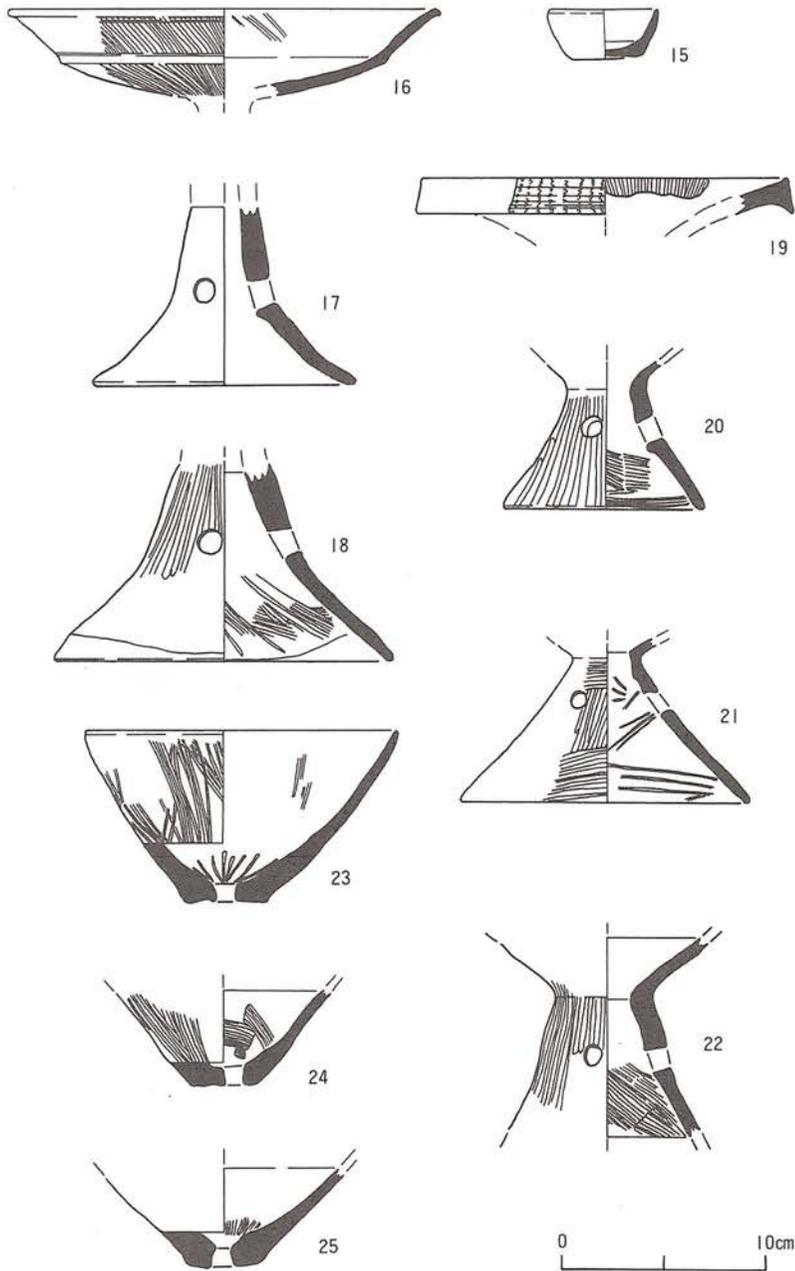
なお、壺(1、2)のみ第XII層出土遺物である。

(1)壺(1~5)

a. 垂下複合口縁壺<sup>㊟</sup>

2は、口縁部が外反し、口縁端部には粘土帯を下方に肥厚させ、外方に面をつくる。頸部には、凸帯が巡り列点文が施される。口径約18.4cmである。3は、口

縁部が頸部で極端に外反し、口縁端部を下方に肥厚させ、外方に面をつくる。口縁端部内外面にヨコ方向の櫛描文が施され、頸部外面にタテ方向のハケ目が残る。4は、口縁部が外反し、口縁端部には粘土帯を下方に肥厚させ、外方に面をつくる。頸部外面にはタテ方向に整然とヘラミガキが施され、内面にはヨコ方向のハケ目が残る。



第4図 S×17出土遺物(2)

**b. 広口壺**

1は、強く外反する口縁部で、端部は肥厚させ、外方に面をつくる。胴部下半を欠損する。胴部は、最大径を中位より上にもつ<sup>Ⓞ</sup>。体部上半には、タテ方向にハケ目が残る。5は、口縁部が外上方へ直線的に開き、端部が丸くおさまる。肩部外面に波状文の直線文を廻らす。体部内面には、平滑にするための板ナデの痕跡

が残る。

**(2)甕 (6~14)**

**a. 受け口状口縁甕**

これらは、6~9の土器である。

6は、強く外反、屈曲して端部は外方につまみ出し、内傾した段を有する口縁部をもつ。端部は、上方に面をもつ。体部上半に櫛状工具により斜格子文がひかれ

る。7は、口縁部が強く外反、屈曲して端部は外方につまみ出し、外傾した面をもつ。8は口縁部が、強く外反、屈曲して端部は外方につまみ出し、丸くおさまる。9は、緩やかに外反、屈曲して端部は外方に立ち上がる口縁部。体部上半は、ハケ目のあと櫛状工具による斜線が施される。口縁部内面には、ヨコ方向にハケ目が残る。

#### b. 「く」字状口縁部

10の一点のみである。口縁部が大きく外反し、端部を丸くおさめる。外面は、口縁部から体部にかけてタテ方向のハケ目、頸部から体部上半の内面には、ヨコ方向のハケ目が残る。

#### c. 台付甕（もしくは、鉢の脚台部）

11、12である。11は、外反しつつ脚台部が広がる。端部に面をもち、地に接する。脚台部内面には、ヨコ方向のハケ目が残る。12は、やや外反しつつ、脚台部が広がる。脚台は、貼り付けである。摩滅のため調整不明。

#### d. 底部

13、14である。タテ方向にハケ目が残っている。底部は平底。

#### (3)高杯（16～18）

16は、高杯の杯部から屈曲、外反する口縁部をもつ。口縁端部外方に面をもち、内外面に丁寧なタテ方向のヘラミガキを施す。17は、ほぼ直立する柱状部から緩やかに広がり裾部でさらに外湾する。17は、内外面摩滅のため調整不明。18は、柱状部から緩やかに広がり裾部で内湾する。外面はタテ方向のミガキで、内面は、斜めにハケ目の痕跡が残る。裾部は、二次焼成を受けている。

#### (4)器台（19～22）

19は、端部下方を肥厚させ面をつくり、端部外面にヨコナデのあと列点文を施す。内外面に丁寧なタテ方向のヘラミガキが施される。20は、脚部が短い。脚部外面には、タテ方向のヘラミガキが施される。脚部内面は、ヨコ方向のハケ目が残る。21は、脚部がほぼ直線的に広がる。端部に面をもち、地に接する。口径が脚裾径よりも小さいものである。脚部外面には、タテとヨコ方向のヘラミガキが施される。脚部内面は、ヨコ方向のハケ目が残る。22は、受部と裾部の一部を欠損する。外面はタテ方向のヘラミガキが施される。脚部内面は、ハケ目が残る。

#### (5)手づくね土器(15)

一点のみ出土している。口縁部が、外上方に直線的のびやや内湾する。やや上げ底の底部で、平底である。完形で出土し、口径は約5.3cm、器高2.5cmである。焼成不良である。色調は淡褐色。

#### (6)有孔鉢（23～25）

有孔鉢については、ほとんどが体部から外上方に直線的のび口縁部が若干内湾する。穿孔は、焼成前に行なわれている。23は、口縁端部がやや尖りぎみである。口縁部から体部にかけて内外面に、タテ方向のハケ目が残る。底部の穿孔は内側から行い、穿孔部を中心に放射状に工具の痕跡が残る。24は、体部内外面にハケ目が残る。底部の穿孔は内側から行っている。25は、底部の穿孔は内側から行い、穿孔部を中心に工具の痕跡が残る。

#### 4. まとめ

安孫子北遺跡のSX17出土遺物の各器種についての概観についてふれてみた。当地の古墳時代前期の標識としては、愛知川、宇曾川下流の拠点集落と考えられている能登川町斗西遺跡<sup>⑨</sup>の資料である。それによると各器種のセット関係から斗西2期（古墳1b<sup>⑩</sup>）を中心とした土器様相と考えられる。なかには、5の長頸壺、16の高杯や、19の器台などの弥生時代のV様式に遡る資料もある。これらの弥生的な遺物は、他の土器と同様に斗西II期まで残っていたと考えることもできる。このような多量な遺物の出土状況は、奈良県矢部遺跡T・1方形区画莖にみられる<sup>⑪</sup>一辺・13mとほぼ同様の規模。周溝内より出土の多量の遺物が「共食行為」のち廃棄されたと推定されている。（竹村 吉史）

#### 註

- ① 『秦荘町歴史文化資料館常設展示案内』秦荘町歴史文化資料館 1995
- ② 『能登川町埋蔵文化財調査報告書第8集—柿堂遺跡—』能登川町教育委員会 1987
- ③ 『能登川町埋蔵文化財調査報告書第10集—斗西遺跡—』能登川町教育委員会 1988
- ④ 『能登川町埋蔵文化財調査報告書第27集—斗西遺跡（2次調査）—』能登川町教育委員会 1993
- ⑤ 『愛知川町埋蔵文化財概要報告書第4集』愛知川町教育委員会 1985
- ⑥ 『第3次なまぎ遺跡発掘調査報告書』愛知川町教育委員会 1996
- ⑦ 『安孫子北遺跡（I・II）発掘調査報告書』秦荘町教育委員会 1991
- ⑧ 註⑦の文献。
- ⑨ 名称は、註③の文献による。
- ⑩ 『長浜市埋蔵文化財調査資料第12集—大塚遺跡—』長浜市教育委員会 1995。本報告書の中で、SB0023から同様の器形の壺が出土している。
- ⑪ 植田文雄「近江湖東地域の庄内～布留式併行期土器編年」『庄内式土器研究VII』庄内式土器研究会 1994
- ⑫ 能登川町教育委員会 植田氏のご教授による。
- ⑬ 『矢部遺跡』榎原考古学研究所 1986